

Title	フェリックス・ガタリの存在論と時間論 : 実践から理論へ
Author(s)	濱田, 力稀
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2023, 7, p. 15-18
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/91173">https://doi.org/10.18910/91173</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# フェリックス・ガタリの存在論と時間論

——実践から理論へ——

科学技術社会論 博士前期課程 1年

濱田 力稀

## §1. はじめに

フェリックス・ガタリは実践と理論の両面で権力に対抗し続けた人物である。ジル・ドゥルーズとの共著である『アンチ・オイディプス』だけでなく、ガタリは自身の単著でも常に権力といかに対抗していくのかを示した。その手法は、社会的に弱者とされている人々を受動性として位置付けるのではなく、彼らの能動性を解放するというものである。そしてガタリは権力への抵抗の拠点を無意識に見出し、人々の実存の生成に見出した。

このような議論は多くの場所でなされている<sup>1</sup>。しかし、そうした議論においてはガタリがラボルド精神病院などで行った実践やその他の政治活動が軽んじられ、ドゥルーズと形成した、そしてガタリが構築した理論にばかり目が向けられている感が否めない。

このような背景から、本研究では二つの目的を設定する。一つ目は、ガタリの実践から理論へと遡及することである。ガタリが理論ではなく実践から出発する人物にもかかわらず、理論から出発する研究が多いのに対して、ここではガタリの方法に則り、実践から始める。そこで、文化人類学者であり哲学者でもあるアネマリー・モルを参照する。彼女はフィールドワークを行い、その結果に存在論的な分析を施している<sup>2</sup>。これを参考にし、ここではまずガタリの実践を扱い、そして理論を扱うという順番を進める。また、彼女の仕事は病院という「現場」で、そこに参画する人々の存在様態に迫るものである。このことは、ガタリの実存論の探求を試みる本研究において、議論を触発するものであるだろう。

もう一つの目的は、ガタリにとって実存とはどのようなものであり、どのように機能しているのかを明らかにすることである。先にも述べたように、ガタリは権力に抗い続けようと苦闘した人物である。このことは、ガタリが政治性に富んだ人物であったことも意味する。ここに、実存主義者としてのガタリの姿が現れ、スピノザが提起した「人はなぜ服従することを欲望するのか」という問いが付き纏うと考える<sup>3</sup>。しかし、ガタリが存在（論）という言葉破棄するわけではない。ドゥルーズは存在と非存在という二項対立を脱構築することを試みた<sup>4</sup>。その結果としてドゥルーズは「存在の一義性」を唱えたが、アラン・バディ

---

<sup>1</sup> 例えば、佐藤嘉幸『権力と抵抗——フーコー・ドゥルーズ・デリダ・アルチュセール——』など。

<sup>2</sup> 具体的には彼女の著書である“The Body Multiple: ontology in medical practice”を参照。

<sup>3</sup> これは『アンチ・オイディプス』でも主要なテーマである。

<sup>4</sup> 千葉雅也『現代思想入門』講談社、2022年、参照。

ウがこれを「存在論的ファシズム」<sup>5</sup>として揶揄した。一方で千葉雅也は、ドゥルーズが存在を脱構築する上で挿入した第三項は「生成変化」であるとし、ドゥルーズをバディウによる批判から救おうとする<sup>6</sup>。フランソワ・ドスによると、ガタリは自分の日記の中でサルトルの文体の真似をするほどに、ジャン＝ポール・サルトルの実存主義哲学から影響を受けていた<sup>7</sup>。さらにガタリは『分裂分析的地図作製法』においてこうした議論を敷衍し、ドゥルーズが差し込んだ存在論的第三項を「実存化する機能」<sup>8</sup>と呼んでいる。以上のような経緯から、ガタリにとって「実存」は重要な概念であり、そして存在を脱構築した先に実存があると考えられる。しかし、実存や存在を思考するためには、必然的に時間が介在するだろう。その中でも、「持続」や「記憶」といった概念、精神病理学的な時間感覚、そして「永遠回帰」の概念が重要となるだろう<sup>9</sup>。以上から、本研究のもう一つの目的は、ガタリにおける存在論と時間論の議論を通じて、彼のなかの実存の機能を明らかにすることである。

## §2. ガタリのラボルドにおける実践

ガタリはラボルド精神病院で、当時では考えられなかった多くの実験を行ったが、この病院の目的は、サルトルの意味での『集列性』からの脱却であり、個人や集団がテクノクラートの展望ではなく倫理的な展望の中で、おのれの存在の意味を獲得し直していくようにする<sup>10</sup>ことであった。つまり、画一化され、規則化された集団形態を目指すのではなく、それぞれの差異を重視した。具体的に言い換えると、「看護する者と看護される者の関係、ならびに在院患者と病院職員の関係の差別をなくす方向に向かう」<sup>11</sup>ということである。

このような方向へと進んでいく実践の例として、「グリーユ(Grille)」と呼ばれるものがある。これは活動分担表であり、知的労働と肉体労働を往来することを目指すものであった<sup>12</sup>。具体的には、医師が雑用を行い、患者も医師の(ような)立場につくことを認めるものである。

グリーユを取り入れることでガタリが目指したのは、個々人が「新たな実存の領土」を獲

---

<sup>5</sup> アラン・バディウ『ジル・ドゥルーズ——存在の喧騒——』鈴木創士訳、河出書房新社、参照。

<sup>6</sup> 千葉雅也『動きすぎではいけない——ジル・ドゥルーズと生成変化の哲学——』河出書房新社、2017年、参照。

<sup>7</sup> フランソワ・ドス『ドゥルーズとガタリ——交差的評伝——』杉村昌昭訳、河出書房新社、2009年、39頁。

<sup>8</sup> フェリックス・ガタリ『分裂分析的地図作成法』宇波彰、吉沢順訳、紀伊国屋書店、1988年、71頁。

<sup>9</sup> 実際にガタリは、ドゥルーズの『意味の論理学』を読み、『アンチ・オイディプス草稿』や『分裂分析的地図作製法』のなかで永遠回帰に言及している。

<sup>10</sup> フェリックス・ガタリ『精神病院と社会のはざま——分析的実践と社会的実践の交差点——』杉村昌昭訳、水声社、2012年、98頁。

集列性とは、「実践的惰性態」としての集団の機能に従属する生活スタイルの空疎な反復である。

<sup>11</sup> 同書、97頁。

<sup>12</sup> フランソワ・ドス『ドゥルーズとガタリ——交差的評伝——』杉村昌昭訳、河出書房新社、2009年、参照。

得することである。実存の領土とは、諸個人の精神において現勢化したその個人の自己認識や自己表象である。そしてこれは、世界との繋がり、社会における自らの立ち位置を確約してくれるものである。「主体感の暫定的定義は次のとおり——『個人的そして/あるいは集合的な諸審級が自己参照的な実存の領土として浮上し、こちらもやはり主体的な他者性と隣接あるいは境界確定の関係に入るような位置に立つことを可能ならしめる条件の総体』」<sup>13</sup>。つまり新たな実存の領土とは、個人の存在、実存の意味づけを内在的/自己準拠的に行うものであり、言い換えるとアイデンティティや自己同一性とも言えるものである。これを新しく獲得すること、すなわち自己を変革していくことがガタリが目論見である。

### §3. ガタリの存在論と時間論

上の実践をもとにガタリの存在論と時間論を論じていく。まず、グリーユは「新たな実存の領土」を獲得することを目指す実践であった。言い換えると、新たな自己の獲得を目指す実践であり、これはつまり「生成変化(devenir)」の実践であるということもできる。生成変化とは、「他に成る」ということである。ドゥルーズとガタリは、『千のプラトー』第10セリーで生成変化について議論しており、生成変化を「非平行的な進化」<sup>14</sup>と表現している。このセリーで挙げられる例としては蘭と雀蜂の関係が有名である。ここで重要なのは、生成変化する「お互いの体の一部分」は雀蜂と蘭のどちらにも属していないということである。つまり、生成変化は二項がお互いに「成る」のではなく、その「間」に生起するものであり、その生成の結果はどちらでもない X であるということである。グリーユはまさに、職業的役割分担を再配置することによって、この生成変化を引き起こす実践である。しかし、他に成ることによって、生成変化した項がそれであるという担保はどこに求められるのだろうか。ドゥルーズは生成変化によって、変化した項は「消失する」と述べる<sup>15</sup>。これはまさに精神分裂症の病理である<sup>16</sup>。しかし、ドゥルーズもガタリも、精神分裂病になることを目指しているのではない。目指すのは「健康的な分裂病」である。自己を失ったまま自己を保つというパラドクスを解決するためにはどうすればよいのだろうか。

ドゥルーズとガタリにおいて、この生成変化の母体となるのは「器官なき身体(corps sans organ)」である。これはスピノザ的な唯一の実体とされる。つまり、無限としての神である

---

<sup>13</sup> フェリックス・ガタリ『カオスマーズ』宮林寛、小沢秋広訳、河出書房新社、2004年、19頁。

<sup>14</sup> 同上。これはおそらく、ベルクソンの「生の飛躍（エラン・ヴィタール）の概念を念頭に置いたものであろう。

<sup>15</sup> ジル・ドゥルーズ『ディアログ』宇野邦一訳、河出書房新社、2011年、ジル・ドゥルーズ、フェリックスガタリ『千のプラトー 中——資本主義と分裂症——』宇野邦一他訳、河出書房新社、2010年、参照。

<sup>16</sup> 現代では統合失調症と呼ばれるが、ドゥルーズとガタリの著作は一貫して「分裂症」などと訳されるため、ここではその訳語を尊重する。また、精神分裂病の主な症状として、自己と他者の境界線の薄れや時空間感覚の統合の欠如などが報告されている（木村敏『分裂病の現象学』筑摩書房、2012年、参照）。

17. ここに、ドゥルーズの語る「存在の一義性」の出発点があると考えられる。この器官なき身体は、『アンチ・オイディプス』においては「未分化な卵」などと呼ばれる。言い換えると潜在性として無限のヴァリエーションを秘めたまま現実化していない身体である。スピノザの神は自然として、無限の様態を伴って表出する。つまり、存在の原点として一義的であるにしても、その存在様態、つまり存在論（どのように存在するか）においては無限の多様性を持っている。そうして表出した様態は、相互に影響を与えあい（触発=affection）、それによって様態は「変容」していく。一方で、スピノザが容認しなかったものがある。それは「変異(mutation)」である。ここでスピノザは、ある存在者が変異を起こした場合、その存在者の本質は変化し、存在者は死に至ると語っている。しかし、ドゥルーズとガタリはこれを容認する。自己は生成変化によって一度死に、新たな自己として生まれ変わるのである。

ここまで、存在論的な議論を進めてきたが、依然としてその存在者がそれであるという担保は存在しない。そこで重要なのが時間についての議論であり、一定の自己同一性を担保するものとしての「記憶」、「痕跡」といった概念であろう。

器官なき身体は『アンチ・オイディプス』においては、「登記されるもの」とも呼ばれる。この「登記される」とはすなわち「記録されるもの」である。ここでは何が記録されるのだろうか。器官なき身体は潜在的には無限のヴァリエーションを持った身体であり、未だ現実化していないものであった。このような身体が現実化するために必要なのは「経験」の登録、つまり輪郭の決定である<sup>18</sup>。前述したように、存在者がどのように存在するかという問いは周囲の環境によって「変容」を受けて決定されていく。人間に関してはそうして形成されていくのが自己同一性であると言えるだろう。こうして変容—記録—現実化というプロセスが生まれ、それを保存するのが「記憶」であり、「非平行的進化」の「痕跡」であるということが出来るだろう。そしてグリーンユはそのプロセスを何度も続けるプロセスであると言える<sup>19</sup>。

以上から、ガタリにおいては存在に対し「どのように存在するのか」という問い（存在論/実存）が優先し、その存在の仕方を絶えず流動化し、自己を変容させていくことが目指されているとすることができる。また、先の器官なき身体の議論から、実存を変容させるには周囲の環境も重要になる。純粋な主体を目指すのではなく、その都度主体「化」することがガタリにおける議論の中心である。実存をプロセス化することこそがガタリの目指すものであり、実存は彼の政治的活動において、権力に抵抗するために必要不可欠な概念なのである。

---

<sup>17</sup> また、精神分析的な文脈や言語学的な文脈でも、この器官なき身体についての議論を展開することも可能なように思われる。

<sup>18</sup> ここにガタリの精神分析を通じた主体形成の理論とドゥルーズの経験主義者としての顔を見ることができる。

<sup>19</sup> 万物は無限に差異を伴って反復するという、ドゥルーズの永遠回帰、ガタリのアイオンを想起することができる。